

ローマ人への手紙11章1-32節 「イスラエルの救い」

1A 残された者 1-10

1B 残された者 1-6

2B 頑なにされた者 7-10

2A 背きによる救い 11-15

3A オリーブの接ぎ木 16-24

1B 根に支えられる枝 16-18

2B 切り取られる枝 19-24

4A 将来のイスラエルの救い 25-32

1B 異邦人の満ちる時以後 25-29

2B すべての人への憐れみ 30-32

本文

ローマ人への手紙 11 章を開いてください。ついにローマ人への手紙における、パウロが福音について論じる教えの部分の最後に入ります。1 章 15 節で、「ぜひ福音を伝えたいのです。」とってから、延々と論じてきた福音であります。11 章でその教えが一応の終わりを遂げます。12 章以降は、そこに示されている神の憐れみに応じて、教会にて神に献身すること、その実践について書いています。

9 章、10 章、11 章にて、パウロがユダヤ人が福音を受け入れない、福音に敵対している現実に対して心を痛め、そこから見えてくる神のお計らいを論じています。9 章において、神の選びの主権があり、ユダヤ人たちの多くが頑なにされていることを述べ、10 章で、信仰によって福音に従わなかったことを話しました。しかし、そこで、イスラエルに与えられた救いの約束が無効になったのではないということを、パウロは 11 章で論じます。そして、いつまでもイスラエルが福音を拒んだままであることはない、終わりには、今の異邦人の救い以上の大きな救いがイスラエルに与えられることを大胆に論じます。

だから、私はとても楽しみなんです。今は、神は異邦人に対して勢いよく救いの御業を行われています。迫害も激しくなっていますが、信じる者たちも増えていっています。そして、少しずつイエスを信じるユダヤ人も興されているということなんです。まだまだ少ないのですが、アメリカにいるユダヤ人は、歴史上、これまでにない大きな割合でイエスを自分の救い主と信じています。これらが、後に起こる大リバイバル、神の救いの予兆であることは間違いのない事実だからです。私たちは、神が初めに選ばれたイスラエルを決して見捨てないみこころを読んでいきます。

1A 残された者 1-10

1B 残された者 1-6

¹ それでは尋ねますが、神はご自分の民を退けられたのでしょうか。決してそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫、ベニヤミン族の出身です。

ユダヤ人たちが、なぜこうも福音に敵対するのか？という疑問があり、それに対して、「神はイスラエルを見捨てられたからだ」という答えを軽率にも出してしまうことに対して、「決してそんなことはありません。」とパウロが断言しています。ローマ書において、他の箇所でも「決してそんなことはありません。」と言っている箇所がいくつかありましたね。「6:1 恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。2 決してそんなことはありません。」これがいかに、愚かな愚論であるか、お分かりになるでしょう。けれども、事実、恵みを放縱に変える偽の教えが、パウロの時代に既にありました。

同じように、異邦人が教会の中で主体になっていく中で、「イスラエルに取って替わって、異邦人の教会が建てられているのだ。」と考えるようになっていったことが、パウロが論じている背景にあります。このローマ、ここからローマ・カトリックが後世に始まりますが、教会史の中で、「ユダヤ人はキリストを十字架につけたので、呪われた民となった。教会こそが神の民である。」という教えが主流となっていったのです。今は、ここまであからさまな反ユダヤ的な教えは少ないですが、それでも、「ユダヤ人が、民族としての救いはもうなくなったのだ。」と考える人々は大勢います。それに対して、ローマ 11 章は確実に、「決してそんなことはありません。」と言っているのです。

そこでパウロは初めに、イスラエルが見捨てられていない証拠の第一は、イエスを信じているイスラエル人たちが現に存在することを示しています。この手紙を書いているパウロ自身が、自分はイスラエル人で、血縁のアブラハムの子孫であり、部族もベニヤミンと具体的に出自をあげることができました。ユダヤ人はユダヤ人のほうで、イエスを信じている者はもはやユダヤ人ではないとする考えが強いですが、いいえ、パウロのようにイエスを信じていながら、自分はユダヤ人であるとはっきりと認識している人々は数多くいます。

^{2a} 神は、前から知っていたご自分の民を退けられたのではありません。

パウロは、イスラエル人のことを「ご自分の民」と呼び、かつ「前から知っていたご自分の民」と言っています。神が、もしイスラエルを途中で見捨てられるのであれば、予めイスラエルをご自分の民とするはずがありません。前から、この民が確かにご自分のものとなる救いの完成のご計画があつて、ご自分のものとして選ばれたのです。思い出してください、キリストにあつて神に選ばれた者たちも、同じようにして前から知られていました。「8:29a 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。」もし、イスラエルが退けられたのであれば

ば、私たちのキリストにある選びにおいても、それは不確かなもので、退けられ得るものなのだと
いうことになるのです！

^{2b} それとも、聖書がエリヤの箇所で言っていることを、あなたがたは知らないのですか。エリヤはイ
スラエルを神に訴えています。³「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇を壊しま
した。ただ私だけが残りましたが、彼らは私のいのちを狙っています。」⁴しかし、神が彼に告げら
れたことは何だったのでしょうか。「わたしは、わたし自身のために、男子七千人を残している。これ
らの者は、バアルに膝をかがめなかった者たちである。」

パウロは、残された民について論じています。まずは自分自身を挙げ、次にエリヤの時代のこと
を取り上げました。バアルの預言者との対決で大勝利を取めたのですが、イザベルの脅しの一言
で、はるか、モーセに主が現れたホレブの山のところまで逃げて行ったのです。そして、主がエリ
ヤに対して、「あなたは何をしているのか？」と尋ねられた時に、答えたのがこの箇所です。エリ
ヤの問題は何だったのか？自らを孤独にした、一匹狼にしたということがあります。主がそこで、
「わたし自身のために、男子七千人を残している。」とあることです。自分だけが取り残されたと思
っても、実は七千人も、バアルに身をかがめなかった者たちを残しておられたのです。「このこと
分かっているのは、自分だけだ。」という思いになってしまうと危険ですね。いろいろな兄弟姉妹と
交わっていくことは、自分だけだという思い込みに陥らないようにする知恵です。ただ、この話はま
た別の機会にして、ここでは、イスラエル人に福音を信じる残された者たちがいる、ということです。

⁵ ですから、同じように今この時にも、恵みの選びによって残された者たちがいます。⁶ 恵みによる
のであれば、もはや行いによるものではありません。そうでなければ、恵みが恵みでなくなります。

パウロは、選びはあくまでも恵みであることを強調しています。行いによるのではなく、恵みによ
って残されています。「Ⅱテモ 1:9a 神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいま
したが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自分の計画と恵みによるものでした。」残りの民
というと、何かエリート意識を持ってしまいそうな響きがありますが、決してそうではなく、むしろ自
分に対する神の恵みを否応なしに知るのです。

2B 頑なにされた者 7-10

⁷ では、どうなのでしょう。イスラエルは追い求めていたものを手に入れず、選ばれた者たちが手
に入れました。ほかの者たちは頑なにされたのです。

イエスをメシアと信じ、受け入れたユダヤ人は残された民でした。イスラエルが追い求めていたも
のを手にすることができました。けれども、9 章で学んだように、他の者たちは、神のみこころがあ
って頑なにされたのです。頑なにされたといっても、自分が信じたいのに頑なにされたのではなく、

信じるつもりはないとして押しのけた決断を、神が固められたということです。

⁸「神は今日に至るまで、彼らに鈍い心と見ない目と聞かない耳を与えられた」と書いてあるとおりです。⁹ダビデもこう言っています。「彼らの食卓が、彼らにとって 畏となり、落とし穴となり、つまずきとなり、報いとなりますように。¹⁰ 彼らの目が暗くなり、見えなくなりますように。その腰をいつも曲げておいてください。」

8 節の中に、二つの聖書箇所があります。申命記 29 章 4 節とイザヤ 6 章 10 節です。彼らが聞く耳を持っていないので、神がそのままにされたことを表現しています。そして 9 節は、詩篇 69 篇からです。そこには、自分が本当に弱っている時に、慰めが最も必要な時に、辛い言葉を与える裏切り者に対する、正しい神の裁きが行われるようにするということを願ったものです。69 篇全体を読むと、イエス様に対するイスカリオテのユダのことを話す預言にもなっていますし。十字架につけられたイエス様に酸いぶどう酒を与えた預言もあります。このように頑なになっている者たちがいる、ということです。

2A 背きによる救い 11-15

そうすると、再び次の疑問が出てきます。

¹¹ それでは尋ねますが、彼らがつまずいたのは倒れるためでしょうか。決してそんなことはありません。かえって、彼らの背きによって、救いが異邦人に及び、イスラエルにねたみを起こさせました。

つまずけば、倒れてしまいます。けれども、ユダヤ人に限っては、全然そうではないことをパウロは論じます。彼らが福音を拒絶してしまいましたが、それによって、もはや立ち返ることのできない民族になったのではない、ということです。ここに神の選びのすごさがありますが、彼らは選ばれているからこそ、背いている時でさえ、神の御目的のために用いられているのです。それが第一に、彼らの背きが異邦人への救いにつながりました。第二に、異邦人への救いがイスラエルに妬みを引き起こしているのです。そしてその妬みによって、幾人かでもユダヤ人が救われるようにしているということです。

¹² 彼らの背きが世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らがみな救われることは、どんなにすばらしいものをもたらすことでしょう。

午前礼拝で説明したとおりですが、ユダヤ人が拒んだことによって、イエスがユダヤ人のメシアに留まらず、世界のメシアになる道筋を造りました。イエス様が、失われたイスラエルの羊のために来られたことを話されましたが、何度となく、ユダヤ人が拒んだので、元々、招いていなかった者

たちを招いたことを語っておられます。王子の祝宴の喩えが、その一つです(マタイ 22:1-14)。それで、イエス様が復活された後は、あらゆる国民を弟子にきなさいという命令になりました。彼らは選びの民なので、彼らの背きや失敗でさえが世界の富、異邦人の富、つまりイエス・キリストにある霊的な富が広がりました。

失敗をも、とてつもない益にしてくださいという、神の深い愛がユダヤ人に対してあるのです。ですから、ユダヤ人が民族的に、国民として救われる時がどれほどすばらしいものかは、言語を絶するもの、信じがたいもの、恐ろしいほどにすばらしいものになるのだということです。ですから、彼らがつまずいたから倒れたのだという考えは、まるで神のみこころをはき違えており、とんでもない過ちであることがわかります。そこでパウロは、これから異邦人の信者に対して、彼らが過ちを犯す傾向があって、それに対して訓戒をしていきます。

¹³ そこで、異邦人であるあなたがたに言いますが、私は異邦人への使徒ですから、自分の務めを重く受けとめています。

ローマにいる異邦人の信者に対して、パウロは語り始まります。そもそも、教会はユダヤ人から生まれました。そして、異邦人が異邦人のままでイエスを信じる信仰によって救われるのかどうか、ということが、エルサレムの公会議で話されたほどです。ユダヤ主義者は、まだパウロの周りをつろつき、彼の働きを引き落とそうとしています。

しかしながら、今後、起こり得る新たな問題、それは異邦人たちが、自分たちこそが選ばれた民であると奢る問題が出てくるとパウロは、すでに感じ取っていたのでしょう。既に、教会においてユダヤ人と異邦人が共にいることで、いろいろな問題が出てきました。一致がなかなかできない問題があったのです。それをローマ 14 章でじっくりとパウロは取り組みます。ユダヤ人だけの問題ではなく、異邦人の愛の欠けた自由なふるまいも問題があったのです。それで、異邦人への使徒として召されていまして、彼らに対して必要な言葉を語っていきます。

¹⁴ 私は何とかして自分の同胞にねたみを起こさせて、彼らのうち何人かでも救いたいのです。

パウロは、福音を拒んでいるユダヤ人たちに対して、「私たちはこれから異邦人たちのほうに向かいます。(使徒 13:46)」とまで言いました。同胞のユダヤ人を見捨てたかのような発言です。けれども、パウロが何としてでもエルサレムに行こうして、実際に行った話を私たちは、使徒の働きで知っていますね。彼は、異邦人のほうに向かうと言い放って、実は、彼らに妬みを起こして、それでその中から何人かでも救われる人が出てきてほしいと願ったのです。パウロ自身、激しい妬みと怒りから、キリストの弟子たちを迫害したけれども、イエス様に出会ったのですから。

異邦人が、キリストに本気で倣って生きていく姿は、これまでなんとも思っていなかったイスラエル人に何か強い思いを残しているはずです。そして、今、ユダヤ人でイエスを信じているという人々の多くが、異邦人のキリスト者を通して救われています。

ドイツに在住経験のあった日本人の方と話をしたことがあります。彼女によると、以前、ドイツではマグロ漁をした後に、脂肪分のところは破棄していたそうです。脂肪分のところ、すなわち大トロです！日本のすし屋がそれを最も高価な寿司のネタであることを知って、それで今は脂肪分を、元も大事な食材として売っているのだそうです。ユダヤ人も、自分が捨ててしまったイエスを知った時、この方が自分たちのメシアだと知る時がやってきます。それまでは、メシアとは関係のないはずの異邦人が、その捨てていたイエスによって、どれだけ救われているかを見て、気づいてくれることを望んでいる、というのがパウロの思いなのです。

¹⁵ もし彼らの捨てられることが世界の和解となるなら、彼らが受け入れられることは、死者の中からのいのちでなくて何でしょうか。

メシアのないままで不信仰のままにいるならば、ユダヤ人として捨てられたようになっていきます。しかし、そのようになっていても、死者からの復活のように、民族が霊的に復興する時が来るのだというのが、彼がここで論じているのです。その根拠は、捨てられたようになっていくことによって、世界が、神との和解を得ることが出来ました。

これが、ユダヤ人たちが捨てられたようになっていくことで、もたらされたことなのです。しかし、彼らが受けられる時が来ます。イスラエルがみな、救われる時がきます。それは、全く可能性のない、死んだような状況の中で復活のように生かされるほどの、大奇跡なのだということです。事実、エゼキエルが37章の預言の中で語っています。枯れた骨が人の姿に生き返る幻です。初めの1-6節を読みます。「1【主】の御手が私の上にあった。私は【主】の霊によって連れ出され、平地の真ん中に置かれた。そこには骨が満ちていた。2 主は私にその周囲をくまなく行き巡らせた。見よ、その平地には非常に多くの骨があった。しかも見よ、それらはすっかり干からびていた。3 主は私に言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるだろうか。」私は答えた。「【神】、主よ、あなたがよくご存じです。」4 主は私に言われた。「これらの骨に預言せよ。『干からびた骨よ、【主】のことばを聞け。5【神】である主はこれらの骨にこう言う。見よ。わたしがおまえたちに息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。6 わたしはおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちのうちに息を与え、おまえたちは生き返る。そのときおまえたちは、わたしが【主】であることを知る。』」この続きを読むと、エゼキエルが預言をすると、干からびた骨がつながって、肉を持ち、筋を持ったのですが、息のない身体でしかありませんでした。しかし、主が息に預言をせよという、主ご自身が息を吹きかけると、それらは生きたものとなり、非常に大きな集団になっていました。これが、イスラエルの全家であると主は言われるのです。実は、「息」のヘブル語と「霊」

のヘブル語は同じ言葉なのです。

今、私たちはユダヤ人がユダヤ人として生きる国、イスラエルを見えています。今から 100 年以上前から世界中から集められてきて、1948 年 5 月 14 日に独立宣言をした国です。しかし、彼らのほとんどがまだ、イエスを自分のメシアとして信じていません。けれども、彼らが霊的に生きる時が来る、ということです。

3A オリーブの接ぎ木 16-24

そこで、異邦人のキリスト者たちが、「彼らは倒れたが、私たち教会が立っている。」という思いがあるならば、それは高ぶっているということを指摘している、パウロの言葉を読んでいます。

1B 根に支えられる枝 16-18

¹⁶ 麦の初穂が聖なるものであれば、こねた粉もそうなのです。根が聖なるものであれば、枝もそうなのです。

麦の初穂が聖なるものというのは、レビ記 23 章には、過越の祭りの三日目に、初穂を献げる祭りが 있습니다。そして、民数記 15 章によると、神が収穫物での初物を、主に奉納物として献げない命令があります。その時は、その初穂からの麦粉でパンを作り、それを神に献げなさいという命令があります(17-21 節)。初穂も神に献げられ聖なるものですが、その麦粉の聖なるものとして献げています。

パウロがここで言いたいのは、ユダヤ人の父祖が初穂であり、その後の肉の子孫であるイスラエル人が麦粉なのだということです。ユダヤ人の父祖、アブラハム、イサク、ヤコブがいます。私たちは 4 章で、私たち異邦人も、キリストにあって、信仰によってアブラハムの子孫なのだということを見ました。アブラハムに約束された祝福が私たちに与えられているということです。ですから、彼らは初穂なのですが、だったならば、その後に出て来た子孫も、聖なるもの、つまり神の選びの民だということです。同じように、根と枝の関係も同じで、根が父祖たちであり、枝がイスラエルの民であります。

¹⁷ 枝の中のいくつかが折られ、野生のオリーブであるあなたがその枝の間に接ぎ木され、そのオリーブの根から豊かな養分をともに受けているのなら、¹⁸ あなたはその枝に対して誇ってはいけません。たとえ誇るとしても、あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えているのです。

このオリーブの木の喩えを、じっくりと考えてみましょう。まず、根は父祖たちですね。そして、そこから育って幹となり、枝が生えました。これがイスラエルの民ですが、これは栽培されたもの、栽培種です。神が意図的にアブラハムを召し、彼がそれに従って出て来た国民であります。栽培さ

れたオリーブの木であります、異邦人は、そうした召しはないままで育っている野生種のオリーブの木です。私たちは野生のオリーブの木の枝なのです。

そこで、キリストを信じるとどうなるか？であります。ユダヤ人たちの多くが福音を拒み、それで異邦人に救いが及びました。つまり、「枝の中のいくつかが折られ、野生のオリーブであるあなたがその枝の間に接ぎ木され」たということになります。分かりますか？栽培種のオリーブの木で切り倒されたところに、野生種のオリーブの木の枝が接ぎ木されたのです。ユダヤ人の一部が不信仰になったところに、異邦人たちが信仰によってつながれたのです。パウロはここで、注意深く、「いくつか折られ」と言っており、「ともに受けている」と言っています。つまり、ユダヤ人の全てが不信仰に陥ったわけではない。信じているユダヤ人がいる。そして、信じているユダヤ人たちと共に、異邦人のキリスト者が養分を受けているということです。ですから、ここで「ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つ」ということです。

そこで、「あなたが根を支えているのではなく、根があなたを支えている」という点が非常に大切です。以前も、なぜ、神がみこころのままに人を頑なにするなら、どうして人を責めることができるのか？という疑問に対して、そうやって神を責め立てているのは、陶器が陶器師に向かって責めているようなものだということを、パウロが9章で話しましたね。ここも似ていて、枝が根を支えていると思っているのは見当違いで、根が枝を支えています。自分たちの持っている信仰が、いかに、イスラエルに対する神の約束、契約、そういったものの延長であって、その逆ではないのです。私たちが、神とイスラエルにある関係という霊的遺産に接ぎ木されたのです。

以前もお話ししましたが、福音書の中でそのことがよくわかる話は、カナン人の女です。フェニキア地方にいるその女が、イエス様に、娘から悪霊を追い出してほしいと願いましたが、イエス様は断ります。そして、「子に与えられたパンを奪って、小犬に与えるのはよくない」と言われました。女は、「主よ、そのとおりです。けれども、小犬もパン屑はもらう。」と答えたのです。この信仰ですね。本来、イスラエルに与えられているものを、異邦人はそのおこぼれをもらっているのだ、ということです。そして、おこぼれと言っても、それはとてつもない霊的な富であり、キリストとの共同相続人になるということまでの富なのです。しかし、あくまでもおこぼれをもらっているだけなのです。それをここでは、野生種のオリーブの木の枝が、神の栽培種の木に接ぎ木されていると説明しています。あくまでも神の憐れみによって、私たちが信じ、立っていることができます。

2B 切り取られる枝 19-24

¹⁹すると、あなたは「枝が折られたのは、私が接ぎ木されるためだった」と言うでしょう。

これは、仮定の問いではなく、残念ながら教会の歴史の中で起こってしまいました。ユダヤ人と異邦人が、キリストにあって一つになっている教会ではなく、異邦人が教会の中に増えていき、つ

いにユダヤ人であればユダヤ教、キリスト教は異邦人のものだとなっていてしまったのです。異邦人が主体のキリスト教会が、ユダヤ人に置き換えられたのだと信じて行きました。そして、ユダヤ人はイエスを拒んだ民であるから、呪われている。ユダヤ教は悪魔の宗教だ。ユダヤ教から何も学ぶことはない。ユダヤ人はキリスト教に改宗させないといけなるとしました。それで、歴史の中では、欧州の教会がユダヤ人を迫害し、虐殺し、強制改宗をさせました。このつまずきは今でも尾を引いていて、ユダヤ人にとって、十字架が虐殺と流血の象徴になっていて、恐怖でしかなくなっているのです。

²⁰ そのとおりです。彼らは不信仰によって折られましたが、あなたは信仰によって立っています。思い上がることなく、むしろ恐れなさい。²¹ もし神が本来の枝を惜しまなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

ユダヤ人が、イエス様をメシアとして受け入れなかった、拒んだことによって、紀元 70 年、ローマによって神殿が破壊され、ユダヤ人は世界の流浪の民となりました。このような厳しさがありますが、異邦人主体の教会が、ユダヤ人と同じ過ちを繰り返すのであれば、同じようにして折られてしまうのです。

²² ですから見なさい、神のいつくしみと厳しさを。倒れた者の上にあるのは厳しさですが、あなたの上にあるのは神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り取られます。

神の慈しみだけによって自分が生きているのだというところに留まってさえいけば、その慈しみが私たちに注がれています。ところが、そうでなければ切り倒されてしまいます。根が自分を支えているという信仰を失うと、結局、自分自身が同じ過ちを犯すことになります。教会の歴史は、ユダヤ人と自分たちの信仰を切り離すことによって、聖書にない伝統を受け継ぎ、それを守り行わなければ教会から離れるということを行いました。ユダヤ人たちが、律法や数々の規則を守らせるという過ちを繰り返しました。当時のユダヤ教の指導者が、ローマとの政治的な駆け引きで、政治権力を持って行って腐敗しましたが、キリスト教も、世の権力者と結託して、世の政治の世界と何ら変わらないことが、次々と起こってきました。ユダヤ人と教会との関係だけでなく、例えば、「あの教会はだめだ、私たちの教会が本物だ」みたいな高ぶった態度は、必ず裁きの対象となります。

²³ あの人も、もし不信仰の中に居続けないなら、接ぎ木されます。神は、彼らを再び接ぎ木することがおできになるのです。

教会は、ここを忘れてしまっていました。救われるのは、ただ信仰だけなんだということです。教会がユダヤ人をキリスト教に改宗させようとしたのですが、彼らにはない習慣まで守り行わせようとし

ました。例えば、ユダヤ人は多くの人が今も豚を食べませんが、豚料理を食べないと立派なクリスマスチャンになれない、というようなことをします。ユダヤ人がユダヤ人として、ただイエスを信じる信仰だけだというのは、異邦人が異邦人としてただイエスを信じるだけで救われるのと同じことです。今でこそ、頑なになっていますが、神は再び接ぎ木することができるのだということです。

²⁴ あなたが、本来野生であるオリーブから切り取られ、元の性質に反して、栽培されたオリーブに接ぎ木されたのであれば、本来栽培された枝であった彼らは、もっとたやすく自分の元のオリーブに接ぎ木されるはずで

す。再び接ぎ木することができるだけでなく、実は私たち異邦人がイエスを自分の救い主として信じるよりも、もっと容易く信じることができるのだと言っています。それは元々、彼らは栽培種の木の子だからです。私たちが、イスラエルの神、ユダヤ人の間での信仰に、接ぎ木されているわけですが、彼らはそもそも、自分たちの神であり、ユダヤ教の中で起こったイエス運動ですから、この方を自分のメシアとして受け入れることは、より自然なことなのです。

4A 将来のイスラエルの救い 25-32

そしてパウロが、将来に約束されている、国民的なイスラエルの救いについて預言します。

1B 異邦人の満ちる時以後 25-29

²⁵ 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにおいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、²⁶ こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。²⁷ これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。

「知らずにおいてほしくはありません」とパウロは言っています。この言葉をパウロは、他の手紙でも使っていますが、使われている時は、本当に知られていない分野であったりします。ここにパウロが明らかにしている神の奥義も知られていません。神の民は初めユダヤ人であったが、今は教会が神の民なのだというのが、歴史の中で教えられてきたことです。

けれども、イスラエルに対する約束はそのまま残っているのです。それは時代で見ることができません。今は、「イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人」の時代です。ユダヤ人が頑なにされていて、異邦人の間で救いが起こっている時代です。しかし、それで終わりではないのです。異邦人の間で救いが満ちたら、神が願っておられたイスラエルの救いを成し遂げてくださるのです。実は今、少しずつユダヤ人の頑なさが氷解しています。ユダヤ人の間でもイエス様を信じる人々が徐々に増えているのです。そして、異邦人の救いが完成する時、満ちる時が来ます。その後、

イスラエルがみな救われる、つまり国民的に救われるのです。その根拠を示すために、パウロはイザヤ書 59 章 20 節を引用しています。

黙示録には、後に神の怒りが現れる患難の時代にも、最後の総仕上げであるように、あらゆる人々に対する宣教が拡がっていく幻があります。7 章には、額に神の印を押された、14 万 4 千人のイスラエル人が、神のしもべとして立てられ、その結果、世界のあらゆる地方に住む諸国民が救いにあずかっている様子を見ることができます。そして 14 章には、なんと、イエスを信じる人がその信仰のゆえ殉教するからなのでしょう、御使い自身が、神から永遠の福音を携えている場面が出てきます。「14:6 また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。」

そして、世界中に福音が宣べ伝えられた後に、イスラエル人が国民として主イエスを信じ、悔い改め、清められる預言が実現します。それは、大患難の時に、選びの民が大迫害をとおり、苦しみを経て、メシアを求めます。ただ神の憐れみを求めるのです。ゼカリヤ書 12 章にこうあります、「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」主が戻って来られるけれども、自分たちの先祖がかつて、十字架につけて突き刺していた者が主ご自身だったと気づいて、嘆くのです。そして救われる恵みにあずかります。

²⁸ 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。²⁹ 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。

たった今、ユダヤ人たちが福音に敵対していることだけを見てはいけなことがお分かりになったかと思います。そうではなく、その敵対でさえ用いて、異邦人への救いの戸が開かれているだけで、ユダヤ人に対する神の愛は変わることがないとのことです。なぜなら、父祖たちに、子孫に対する約束をしておられたからです。

2B すべての人への憐れみ 30-32

³⁰ あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けています。³¹ それと同じように、彼らも今は、あなたがたの受けたあわれみのゆえに不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今あわれみを受けるためです。³² 神は、すべての人を不従順のうちに関じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。

実は神は、人類に対する壮大なご計画を持っていました。それは、最終的には、すべての人が

神の憐れみを受けるために、すべての人に、自分たちが不従順であることを知らせるという計画でした。神の憐れみを知るといことは、自分自身が救いようのない存在なのだ、滅ぼされて当然の存在なのだということを知らないといけません。

それで、神がなされたことは、ご自分の国民を造られることです。その国民に、一方的な憐れみをおかけることです。それによって、それを受けていない異邦人は、自分たちがいかに不従順であるかが明らかになりました。異なる神々を拝み、神の御心に反することを行っていることで明らかにされます。そこで今度は、選ばれた国民であるユダヤ人が憐れみを本当の意味で知らないといけません。自分たちは民族が選ばれているから自動的に救われるのだと思っていました。ユダヤ人であるだけで従順の民にされているかのように思っていました。けれども、ただ信仰によって救われる道を広げ、これまで不従順が明らかにされていた異邦人が憐れみを受けるようにされたのです。そして今も、福音に聞き従わないことで不従順ではありますが、この後について、本当の意味での憐れみを受けることができる、その心が備えられています。

神は、人が頑なであればそのまま裁かれると私たちは思ってしまう。けれども、神はもっともっと高い次元で考えておられるのです。その頑なさを敢えて用いられて、すべての人が神の憐れみを受けるためのご計画を初めから立てておられたのです。今回は、11章の残りの部分、33節から36節までで、パウロが神の知恵と知識、主権に圧倒されている部分を読みます。